

## 1、本園の教育理念・目標

名前

元気な子 元気で明るく、たくましく、生き生き活動できる子  
 つよい子 やさしい心もち、はい、ありがとう、すみません、わたしがしますと言える心のつよい子  
 創造する子 よく見、よく聞き、よく話し、個性豊かにのびのび表現、創造する子

- ・あらゆる環境に能動的に働きかける事ができる心と体を育てる。
- ・集団生活を通し、他者の自由を認める事ができる心を育てる。
- ・自己目標に向かっていける心を育て、自己肯定感を育てる。

## 2、本年度、重点的に取り組む課題

年長を幼稚園の中心として、幼稚園生活を送ることによってどのような変化があったのか？教育方針、学年、学期に関連付けて考察する。

- 一年を通して、一人一人の遊びを探求し、環境を整える。
- 子どもへのアプローチを三角形（間接的）をイメージしながら保育を行う。
- 新園舎の環境を知り、子どもたちと暮らしを創っていく。

【評価基準】 A 十分達成されている（おおむね80%以上）  
 B ほぼ達成されている（60%～80%くらい）  
 C 取り組まれているが成果が十分でない（40%～60%くらい）

## 3、評価項目の達成及び取組状況

評価項目	結果	理由
幼稚園の教育課程の編成・実施に関して教職員間の共通理解は図られていたか？	B	教育課程を実施しての評価を次年度の教育課程に反映することが大切になる。月・週の指導計画立案時に学年会議の中で活用されており、その点からも共通理解が図られていたと判断される。
長期的に保育を計画し、実践していたか？ （一年の流れを把握し、適切に職務する。）	A	月・週の指導計画作成のために各学年ごとに打ち合わせ会議を設定して、計画・実施・反省を行っていたことは評価される。年度末に学年の1年間の遊び活動を表にまとめて俯瞰できるようにしていた点も評価される。
保育の質の向上のために、研修及び学びの場を充実させていたか？（職務向上の為に必要なスキルを身につけ向上させる）	A	研修日を位置付け、外部講師を招いての研修により教員のスキルアップが図られていた。また、学年会議を設定することにより、ベテラン教師と若手のスキル共有や学びの場になっており評価できる。
保護者のニーズと把握に努め、要望や苦情に適切な対応をはかれたか？	B	園だより・学年だよりや、連絡アプリのWeb連絡を活用し、子どもの活動等の情報発信に努めていた。保護者アンケートにより保護者からの声を運営の改善に活かしていた。
保育以外の職務に対しても積極的に動き、よりよい環境をつくられていたか？	B	園外活動で教師が地域の方に挨拶したり、話しかけるのを見て、子どもも挨拶したり話しかける場面が多くみられる。地域の方と園児のふれあいが、園の教育活動への理解や協力を得られることにつながっていると考えられる。
安全管理（施設、設備、通園など）を日々行っていたか？	A	いつ訪問しても、園庭の環境が子どもが遊びたくなるように季節に応じて変化し工夫されており評価できる。安全面を点検しながらこのような環境設定を園長が率先して行っている場面を目にすることが多かった。

#### 4、2019年度の感想など

新園舎での保育、保育部の新設、新型コロナ感染による教育活動の自粛など、いろいろな環境の変化の中での保育は大変なことが多々あったことと思います。しかし、いつも子どもの笑顔が溢れておりました。

遊びのための環境設定、異年齢間での見て学ぶ体験の重視、保育者の子どもの見守り・言葉かけ、などの援助行為を日々大切にされていたことが子どもの笑顔につながったと思います。

子どもが自分の気持ちから楽しく活動することを大切にして保育を行うことを教職員全員が目指していた結果によるものだと思います。

#### 5、2020年度に向けて要望など

教育にゴールはなく、常により良くを目指すことが重要だと言われます。

そのためにも、研究と修養が大切になると考えます。忙しい中で時間をつくるのは大変でしょうが、今ある研修、学年打ち合わせ会議の充実を図っていただければと思います。保育者が楽しいことが、より良い教育につながるとことを大切にまた次年度もご活躍ください。

## 1、本園の教育理念・目標

名前

元気な子 元気で明るく、たくましく、生き生き活動できる子  
 つよい子 やさしい心を持ち、はい、ありがとう、すみません、わたしがしますと言える心のつよい子  
 創造する子 よく見、よく聞き、よく話し、個性豊かにのびのび表現、創造する子

- ・あらゆる環境に能動的に働きかける事ができる心と体を育てる。
- ・集団生活を通し、他者の自由を認める事ができる心を育てる。
- ・自己目標に向かっていける心を育て、自己肯定感を育てる。
- ・リスクという危険を体験し、危険予知能力を高める。

## 2、本年度、重点的に取り組む課題

年長を幼稚園の中心として、幼稚園生活を送ることによってどのような変化があったのか？教育方針、学年、学期に関連付けて考察する。

- 一年を通して、一人一人の遊びを探索し、環境を整える。
- 子どもへのアプローチを三角形（間接的）をイメージしながら保育を行う。
- 新園舎の環境を知り、子どもたちと暮らしを創っていく。

## 3、評価項目の達成及び取組状況

【評価基準】 A 十分達成されている（おおむね80%以上）  
 B ほぼ達成されている（60%～80%くらい）  
 C 取り組まれているが成果が十分でない（40%～60%くらい）

評価項目	結果	理由
幼稚園の教育課程の編成・実施に関して教職員間の共通理解は図られていたか？	B	園長その他役職にある者のリーダーシップの下、日常的に園の使命、教育目標、指導目標の浸透、大切にしたいことの共有が図られていた。短時間勤務の職員への対応については把握していない。
長期的に保育を計画し、実践していたか？ （一年の流れを把握し、適切に職務する。）	A	指導的立場の職員を中心に保育計画の確認がなされていた。長期計画が短期計画の計画・記録の様式に反映されるなど工夫されていた。
保育の質の向上のために、研修及び学びの場を充実させていたか？（職務向上の為に必要なスキルを身につけ向上させる）	A	研修会への参加や講師招聘による園内研修等、受動的学びにとどまらず、園内外での発表等アウトプットによる研鑽等、通常以上の学びの場の充実が見られる。
保護者のニーズと把握に努め、要望や苦情に適切な対応をはかれたか？	A	園長・副園長を中心に全ての職員が、子ども・保護者を中心に据えた保育・子育て支援を実践している。そのため、ごく自然に保護者の声に真摯に向き合えることが出来ている。
保育以外の職務に対しても積極的に動き、よりよい環境をつくられていたか？	B	基本的には、協力的な態度を持って環境整備に努めることが出来ている。個々の取り組みを全体で共有したり、全体的なイメージを持って個々が取り組むことへのさらなる努力が望まれる。
安全管理（施設、設備、通園など）を日々行っていたか？	A	自由・おおらかさの中に、ヒヤリハットを共有するとともに、重く受け止め自己を省みる姿勢を育む風土がある。個々の安全管理の知識を高めるような取り組みがあるとなおよい。

#### 4、2019年度の感想など

幼稚園から認定こども園への移行による教職員の負担は相当なものであったことが想像できる。その中で、子どもの人権を大切にされた保育、主体的な遊びを育む教育がさらに充実されたことに感服している。

また、3号認定の子どもを対象とした保育では、これまでに培われた星の子幼稚園の教育課程に連なる保育内容が実践された。認定こども園での未満児の保育の先駆的取り組みとして、高く評価できる。

行事についても、新たな取り組みがなされた。以前より私立幼稚園における行事の在り方は、子どもの為か、保護者の為か、定員充足為かと議論がなされてきた。どれかではなく、真に子どもを中心に行われることで、他が副次的に満たされていくというのが本来の在り方である。音楽会での取り組みでは、園長のリーダーシップの下、本来の在り方で試行・実践された。保護者の満足度を測定したか否かは把握していないが、次年度の定員は満たされたと聞いている。さらに、取り組みのプロセスでは、個々の教師の成長のみならず同僚性の促進もうかがえた。

新型肺炎への対応では、これまで取り組んできた保護者との情報共有ツールが機能し、柔軟に温かく保護者を支援したことも付記したい。

#### 5、2020年度に向けて要望など

学び続ける保育者集団である。その歩みを止めることなく突き進んでほしい。一方で、オープンな園であることから、評価者を含め様々な研究者が出入りする機会が多くある。専門家の助言には学びも多いが、時には戸惑いや揺れを生じさせることも推測する。戸惑いや揺れを乗り越えて、「北海道の」、「手稲区の」、「星の子幼稚園の」唯一無二の保育を確立して行ってほしいと願っている。

教育内容の充実と比較して、養護に関する内容はどこまで充実されたかが見えにくい。特別支援に関する意識は高い園ではあるが、小児保健、児童福祉領域の知識を高めることで、より確かな支援が実現すると考える。

同僚性が育まれつつあることを肌で感じる。ガーランドらが指摘するように、保育者と子どもとのいい関係は自然に形成されるものではなく、大人同士の人間関係の性質に影響される。温かで刺激し合う幸せな関係性を大切にしていってほしい。

河邊氏による10DaysPlanとの出会いは、本園の理念・目標・重点課題の推進にとってエポックメイキングではなかっただろうか。遊び・生活を書き留めることで子どもの新たな捉えなおしをし次を構想する為に、またカリキュラム・マネジメントの重要なツールとして、活用・充実されていくことを期待している。

## 1、本園の教育理念・目標

名前

元気な子	元気で明るく、たくましく、生き生き活動できる子
つよい子	やさしい心もち、はい、ありがとう、すみません、わたしがしますと言える心のつよい子
創造する子	よく見、よく聞き、よく話し、個性豊かにのびのび表現、創造する子
<ul style="list-style-type: none"> <li>・あらゆる環境に能動的に働きかける事ができる心と体を育てる。</li> <li>・集団生活を通し、他者の自由を認める事ができる心を育てる。</li> <li>・自己目標に向かっていける心を育て、自己肯定感を育てる。</li> <li>・リスクという危険を体験し、危険予知能力を高める。</li> </ul>	

## 2、本年度、重点的に取り組む課題

<p>年長を幼稚園の中心として、幼稚園生活を送ることによってどのような変化があったのか？教育方針、学年、学期に関連付けて考察する。</p> <p>○一年を通して、一人一人の遊びを探索し、環境を整える。</p> <p>○子どもへのアプローチを三角形（間接的）をイメージしながら保育を行う。</p> <p>○新園舎の環境を知り、子どもたちと暮らしを創っていく。</p>
--

## 3、評価項目の達成及び取組状況

【評価基準】 A 十分達成されている（おおむね80%以上）  
 B ほぼ達成されている（60%～80%くらい）  
 C 取り組まれているが成果が十分でない（40%～60%くらい）

評価項目	結果	理由
幼稚園の教育課程の編成・実施に関して教職員間の共通理解は図られていたか？	B	教育課程はよく考えられて編成されている。しかし、子ども園創設以降の数年間、環境の大きな変化ゆえ、子どもの実態を観察した上で、調整する必要があるだろう。全教員が調整の話し合いに参加し、話し合いを重ねる過程で、共通理解がさらに進んでいこう。
長期的に保育を計画し、実践していたか？（一年の流れを把握し、適切に職務する。）	B	保育変革期にあり、保育者自身が長期的展望を抱く難しさがあった。しかしその中でも、子ども目線を大事にし、日々の保育における子どもの姿と行事の繋ぎ方について真剣に話し合われ、次年度にいきる成果があげられた。
保育の質の向上のために、研修及び学びの場を充実させていたか？（職務向上の為に必要なスキルを身につけ向上させる）	A	保育研究者に広く園の実践を開き、研修講師として招聘している。保育者には、研修を通して知識や技術をインプットしようとする姿勢がある。また、学会や研修等の場で自身の実践をアウトプットする機会が与えられ、実践の省察が促されている。
保護者のニーズと把握に努め、要望や苦情に適切な対応をはかれたか？	A	保護者からの要望や対応については、HPで随時公開され、真摯に対応しようとする姿勢がみられる。災害時等の有事の際にも、地域のニーズに対応しようとする姿勢がある。保育者が、保護者から支えられている、理解されていると実感しながら保育を進めている。
保育以外の職務に対しても積極的に動き、よりよい環境をつくられていたか？	B	子ども園化したことで、業務が増えている面がある。保育者の時間管理や創意工夫を促し、保育者同士で話し合う時間、次の日の環境構成を行う時間を今まで以上に確保して欲しい。
安全管理（施設、設備、通園など）を日々行っていたか？	B	4月～5月頃は、新園舎に保育者も子どもも慣れず、危険な場面があったが、安全点検を強化し、減少に向かった。防災訓練等は、様々なシチュエーションで行うことも検討している。

#### 4、2019年度の感想など

数年前から、遊びを通して5領域を総合的に学ぶ保育の理念が追求されている。本年度は、幼稚園から子ども園に変わり、園舎・園庭が新設された。行事の意義や方法についての見直しも進んだ。保育者は、柔軟に対応し、協力し合い、変化に適応してきた。そのことが、子どもたちと保育者との安定的な関係の構築に寄与してきた。

保育者は、大学の研究者をふくむ複数の講師から研修を受けている。その中の数名からは継続的な研修とフィードバックを受け、常に前向きに技術や知識を吸収しようとしている。また、学会発表や研修講師をする機会が与えられ、自身の実践をアウトプットする経験を通して、自身の実践への省察がなされている。

このような背景のもと、今年度は、第一に、室内遊びと外遊びの時間のバランスを見直し、担任と副担任等による複数の目で子どもをみとる室内遊びのコアタイムの確保に取り組み、幼児理解を深めた。第二に、週案を作成し、子どもの興味や遊びの変化を継続的にとらえ、ねらいを意識した環境構成に取り組んだ。第三に、行事の意義について見直し、日々の保育における子どもの姿と行事との繋がりを見直した。第四に、地域の自然、歴史、文化をどのように子どもに伝えていくのか、星の子らしい保育は何か考え始めている。最後に、この一年間に園で生じた遊びを振り返り、どのような経験のつながりや特徴があったか省察をしている。このことは、次年度に子どもの遊びをより深め、広げるための援助の見通しを持つことにつながるだろう。

#### 2020年度に期待すること

2019年度に育まれてきた保育者の力は、直線的にはなく、らせん状に向上していくと思われる。つまり、これらの力が定着し、子どもたちにより豊かに還元されるためには、本年度に取り組んだことを継続する姿勢が期待される。研修もまた、単発のものから、今まで以上に豊かなフィードバックを含めた「循環型の研修」を意識し継続していくことが必要と考えられる。

そのうえで、さらに次年度に期待することは、保育者同士が子どもの姿や環境構成について話し合う時間の確保による「保育を語り合う文化の生成」である。年に数回行われる研修で得た知識やスキルを、日々の保育の具体的な場面でどのように適用するのか、講師抜きでも保育者同士が常に話し合い、知識やスキルを定着させてほしい。そのためには、第一に、管理職による時間管理、保育者自身による時間の使い方の創意工夫が必要と思われる。第二に、バス添乗等、必ずしも保育者でなくても賄える仕事については、相応の人材確保が検討されてほしい。第三に、保育者同士の話し合いを活性化させるリーダーの養成である。このリーダーは年齢に関係なく、スキル・経験・意欲のある保育者には機会が与えられてほしい。最後に、幼稚園から子ども園へという変革期において、様々な思いを抱える保育者がいることに配慮し、今まで以上に思いをとりこぼさないようにしてほしい。

これらによって、乳児と幼児が育ちあい、4歳5歳が同じ部屋で育ちあう星の子幼稚園らしい保育は何か、さらに深めていくことが期待される。